

# 張籍詩訳注(5)

——「野老歌」「寄遠曲」——

畑村 学  
橘 英範

## The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (5)

Manabu HATAMURA  
Hidenori TACHIBANA

### はじめに

本稿は、本誌四五号・四六号に掲載された「張籍詩訳注」(1)と(4)(以下、前稿(1)と(4)と称する)の続稿である。訳注の方針・注釈書等については、前稿(1)および(3)をご参照いただきたい。

なお、本稿より、静嘉堂文庫所蔵『張司業集』(もと陸心源の蔵。『甯宋楼藏書志』巻六九に「張司業集 不分卷 旧抄本」)を校勘に用いることにする。この本(以下静嘉堂本)は、詩の配列は四部本と同じであるが、巻が分かれておらず、四部本の巻七以降に「拾遺」として採録される詩は採録されていない。また、字句にも四部本及びその他の諸本に見られない特徴があり、今後校勘に用いると同時に、テキストの系統についても調査していくことにしたい。

前稿(3)(4)についても、(1)(2)と同様に、多くの方から有益な御教示・御批正をいただいた。以下、その点のいくつかについて、補足を行っておく。

5 「寄遠曲」第6句「無因重寄双瓊瑤」について、市川桃子氏より、「プレゼントを(心を)贈りたいのに贈る手段がない。そのことが別れの悲しみ

をいや増す」という気持ちの動きは、「古詩十九首」の主要な感情の一つであるという御教示をいただいた。氏の言われる通り、其六・九が、遠く別れている親しい間柄にある人(妻、あるいは友人)に花や香り草を贈ろうと思うが、道が遠いためにそれがかなわず憂いが増すという内容の詩であり、「寄遠曲」と共通する。

また伊藤直哉氏より、第2句と第4句の両方とも句中対が用いられていること、詩中で「江」が四回使われており、これがいかにも樂府的なリズム感を出していることをご指摘いただいた。

6 「行路難」について、同じく伊藤氏より、第3句「羸馬」の用例として引いた韋応物「温泉行」の訓詁の誤りを御指摘いただいた。「弊裘羸馬凍えて死せんと欲するも、頼いに主人の杯酒多きに遇う」と改めたい。第5句「牀頭黄金尽」は、先行作品から見ても、「飲み代が乏しくなり、うさ晴らし

二〇〇〇年十二月十三日受理

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科講師  
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教

が出来ない」というニュアンスではないかとの御指摘をいただいた。御指摘通り、前稿の「牀頭」の【語釈】に記した多くの用例がその方向の意味で用いられており、そういったニュアンスを含むものであったと思われる。

さらに伊藤氏より、7「征婦怨」の第4句「家家」について、太田辰夫氏の『中国語歴史文法』（七九〇八〇頁）に言うように、「毎々」を示す重復形式で、「どの家でも」の意であり、そのように解釈した方が第2句の「漢軍全没」とよりよく呼応することを指摘いただいた。8「白紵歌」についても、1句目「皎皎白紵白且鮮」の「白」と8句目「還把玉鞭鞭白馬」の「白」が首尾呼応している点の御指摘をいただいている。

以上のように、今回も多くの方々から貴重な御意見御教示をいただいたこと、誠に感謝に堪えない。今後とも御指導御鞭撻を賜うことができれば幸甚である。

### 訳注

本篇には、9「野老歌」・10「寄衣曲」（ともに巻一）の訳注を掲載する。

### 5 野老歌

#### 【題解】

田舎じじいの歌。

徐澄宇『張王樂府』には樂府として採録されるが、『樂府詩集』には収められていない。一作の「山農詞」でも同じ。

「野老」の語、経書や先秦諸子に用例が無い。早い例としては『漢書』藝文志に、『野老十七篇』という著作が記録されており、「六国時、在齊楚間」（六国の時、齊楚の間に在り）と言う。応劭注に「年老居田野、相民耕種。故号野老」（年老いて田野に居り、民の耕種するを相く。故に野老と号す）と言う。

文学作品では、六朝に用例が少なく、丘遲「且癸魚浦潭」（『文選』卷二七）に、「村童忽相聚、野老時一望」（村童 忽ち相聚まり、野老 時に一たび望む）とあり、都とは異なる地方の人々の様子を詠じたなかに見える。唐詩では、自称・他称ともに用いられ、なかでも杜甫が六例用いているのは唐詩中で最も多い。うち自称が五例を占め、他称は一例のみ。杜甫「野老」（『詳註』

卷九）は、杜甫が自称として用いている例で、その冒頭に「野老籬辺江岸迴、柴門不正逐江開」（野老の籬辺 江岸迴り、柴門正しからず 江を逐いて開く）とある。張籍の用例はこれのみ。

なお、杜甫の野老に関しては、川合康三氏に「杜陵野老」―杜甫の自己認識―（『中國文人の思考と表現』所収、汲古書院、二〇〇〇年）がある。詩題は、各本が一作として注記する「山農詞」であれば、山暮らしの農夫のうた。古く『周礼』地官「掌葛」に、「掌葛、掌以時徵絺綌之材于山農。凡葛征、徵草貢之材于沢農、以当邦賦之政令。以權度受之」（掌葛は、時を以て絺綌の材を山農に徴すを掌る。凡そ葛の征、草貢の材を沢農に徴して、以て邦賦の政令に当つ。權度を以て之を受く）とあり、「山農」が「沢農」（水沢地区で耕作する農夫）と対比して用いられている。

六朝詩には用例が見えず、唐詩には張籍のここ以外に二例、顧況に「過山農家」（『全唐詩』卷二六七）があり、また韓愈「南溪始泛三首」其二（『繫年集釈』卷一二）に、「山農驚見之、随我觀不休」（山農 驚いて之を見、我に随いて觀て休まず）とある。

「野老歌」は、張籍の詩の中では最も有名なもののひとつである。そのため多くの選注本に採録され、この詩を扱った専論（後述）もある。よって本訳注は、屋上に屋を架するきらいがないわけではないが、これまでの成果を踏まえつつ、筆者なりに調べて明らかとなったことも多少は記し得たと思う。

#### 【本文・書き下し文】

- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1 老翁家貧在山住 | 老翁 家貧しくして 山に在りて住み  |
| 2 耕種山田三四畝 | 耕種す 山田 三四畝         |
| 3 苗疎税多不得食 | 苗疎らに税多くして 食らうを得ず   |
| 4 輸入官倉化爲土 | 官倉に輸入して 化して土と爲る    |
| 5 歲暮鋤犁倚空室 | 歲暮 鋤犁 空室に倚り        |
| 6 呼兒登山收橡實 | 兒を呼び山に登りて 橡実を収めしむ  |
| 7 西江賈客珠百斛 | 西江の賈客 珠 百斛         |
| 8 船中養犬長食肉 | 船中に犬を養いて 長に肉を食らわしむ |

#### 【押韻】

住―去声十遇  
畝―上声四五厚

土―上声十姥  
室・実―入声五質  
斛・肉―入声一屋

※前半四句は異なる撰同士のもの、或いは同撰内での通押の關係にある。去声十遇と上声十姥は、同じ遇撰内での上去通押であり、同様の例は初唐の頃より見える。また上声四五厚は流撰に属しているが、これが遇撰に属する文字と通押する例も同じく初唐の詩文にすでに見える。以上のことは、鮑明煒氏の『唐代詩文韻部研究』（江蘇古籍出版社、一九九〇年）に紹介されている。

一一〇・一一一頁、及び四〇七、四一〇頁。その他、松尾良樹氏の「李義山詩韻譜」（『東方学報』五四、京都大学人文科学研究所、一九八二年）に、李商隱の詩に同様の通押の例が見えることが指摘されている。二六八頁。  
なお、後半四句は毎句押韻で、二句毎に換韻している。

### 【口語訳】

- 1 よぼよぼのじいさん 家は貧しく 山に住み
- 2 山の田 三、四畝を耕し種を播いた
- 3 苗はまばらで税は多いため 食べることもできないのに
- 4 役所の倉庫に運び込まれて 土となった
- 5 歳の暮れ すきは がらんとした部屋に立てかけられ
- 6 子供を呼び 山に登ってどんぐりを集めてもらう
- 7 西江の商人は 真珠を百斛も持っており
- 8 船で犬を飼って いつも肉を食べさせている

### 【語釈】

1・2 老翁家貧在山住、耕種山田三四畝  
〔老翁〕年老いた翁。「翁」ですでに老人を意味するのに、さらに「老」を付加しているのは、それによってこの野老が極めて高齢であることを表そうとしたと考えられる。『後漢書』方術伝の費長房の伝に、「費長房者、汝南人也。曾為市掾。市中有老翁売薬、懸一壺於肆頭、及市罷、輒跳入壺中」（費長房は、汝南の人なり。曾て市掾と為る。市中に老翁の薬を売る有りて、一壺を肆頭に懸け、市の罷むに及び、輒ち跳びて壺中に入る）とあり、また『晋書』文苑伝の顧愷之の伝に、「百歳老翁攀枯枝」（百歳の老翁 枯枝を攀づ）と、百歳の老翁が記される。

六朝の用例では、曹丕「与呉質書」（『文選』卷四二）に、「已成老翁、但未白頭耳」（已に老翁と成りて、但だ未だ白頭ならざるのみ）と見える。唐

詩では自称・他称両方の意味で多く用いられ、例えば、李頎「野老曝背」（『全唐詩』卷一三四）には、「百歳老翁不可種、惟知曝背樂殘年」（百歳の老翁種うるべからず、惟だ背を曝して残年を楽しむを知るのみ）と、百歳の野老が詠われる。陳注は、王維「夷門歌」（趙本卷六）に、「向風勿頸送公子、七十老翁何所求」（風に向かいて頸を刎ねて 公子を送る、七十の老翁 何の求むる所ぞ）とあるのを指摘するが、これも七十という高齡の翁。

杜甫にも用例が多くあり、有名な「石壕吏」（『詳註』卷七）にも、「老翁踰牆走、老婦出看門」（老翁 牆を踰えて走り、老婦 出でて門を看る）とある。杜甫の老翁も、張籍と同じく社会的弱者として描かれている。

張籍にはこの他二例。うち440「洛陽行」に、「陌上老翁双淚垂、共說武皇巡幸時」（陌上の老翁 双淚垂れ、共に説く 武皇巡幸の時を）とあるのは他称で用いた例で、211「新除水曹郎答白舍人見賀」に、「諸曹縦許為仙侶、羣吏多嫌是老翁」（諸曹 縦い仙侶と為るを許すも、羣吏 多く是れ老翁なるを嫌う）とあるのは自称として用いている。

なお『全唐詩』は「老農」（老いた農夫）に作り、『叩彈集』卷三は「老弱」（老人と子供）に作る。

「老農」であれば、古く『論語』子路篇に、「樊遲請学稼。子曰、吾不如老農」（樊遲 稼を学ばんことを請う。子曰く、吾 老農に如かず、と）という用例があり、農作業を熟知している年寄りの意。唐詩にも詩語として頻出し、杜甫にも一例、「嚴公仲夏枉駕草堂兼携酒饌」（『詳註』卷一）に、「看弄漁舟移白日、老農何有盤交歡」（看るみる漁舟を弄して 白日移る、老農 何ぞ交歡を盤す有らん）と見える。張籍には他に用例がない。

「老弱」であれば、老人と子供。いずれも社会的弱者であることで共通し、『孟子』梁惠王上に、「凶年饑歲、君之民老弱轉乎溝壑、壯者散而之四方者幾千人矣。而君之倉廩實、府庫充。有司莫以告。是上慢而殘下也」（凶年饑歲には、君の民 老弱は溝壑に転じ、壯者は散じて四方に之く者幾千人ぞ。而るに君の倉廩は実ち、府庫は充つ。有司 以て告ぐる莫し。是れ上慢にして下を殘うなり）と、孟子が鄒の穆公を非難したことは見える。民衆が困窮しているというのに君主の倉庫は食物で溢れているというのは、この詩の批判の内容と軌を一にしているが、それ故にこそ後から字句を改められた可能性も大いに考えられる。

六朝では、楊雄の「長楊賦」（『文選』卷九）に、「蹂屍輿廝、係累老弱」（屍を蹂み廝を輿にし、老弱を係累す）とある。唐詩にはこの他三例。張籍以前では、杜甫「遣興三首」其二（『詳註』卷七）に、「老弱哭道路、願聞甲兵休」（老弱 道路に哭し、願わくは甲兵の休するを聞かんことを）とあり、同時代では韓愈「餽饌」（『繫年集釈』卷一）に、「河隄決東郡、老弱隨驚湍」（河

隄 東郡に決し、老弱 驚湍に随う」とある。

「家貧在山住」「家貧」は、曹植「靈芝篇」(『宋書』樂志四)に、「董永遭家貧、父老財無遺」(董永 家の貧なるに遭い、父老 財 遺す無し)とある。唐詩には常見の語。「在山住」の「在」は、ここでは介詞的な働きをしている。

「耕種」耕耘し種を播く。春の農作業を指す。『莊子』讓王に、「春耕種、形足以勞動、秋收斂、身足以休息」(春には耕種して、形 以て勞動するに足り、秋には收斂して、身 以て休息するに足る)と古い用例が見える。

六朝の用例としては、陶淵明「癸卯歲春懷古田舎」其二(四部叢刊本卷三)に、「耕種有時息、行者無問津」(耕種するに 時有りて息うも、行く者 津を問う無し)とある。唐詩には、孟浩然「山中逢道士雲公」(『全唐詩』卷一五九)に、「春餘草木繁、耕種滿田園」(春餘 草木繁く、耕種して 田園に満つ)とあり、李白「贈張公洲革処士」(王琦注本卷九)に、「每將瓜田叟、耕種漢水濱」(毎に瓜田の叟と、耕種す 漢水の濱)とあるなど、用例が多い。杜甫には熟語としての用例は無い。張籍にこの他一例、419「江村行」に、「一年耕種長辛苦、田熟家家將賽神」(一年耕種して 長に辛苦す、田熟して 家家 將に神に賽いんとす)とある。

「山田」山間にある田。それゆえに收穫量が少なく下等な田とされる。『管子』山國軌に、「山田閑田曰、終歲其食不足於其人若干、則置公幣焉、以滿其准」(山田閑田(「曰」は衍字とされる)にして、終歲 其の食 其の人に足らざること若干なれば、則ち公幣を置きて、以て其の准を満たす)とあり、山間の田地や地味の優れない土地では人民の食糧が不足するため、政府が公金を支給すべきことが記される。陳注は『後漢書』淳于恭伝に、「家有山田果樹」(家に山田果樹有り)とあるを引く。

六朝詩の用例は数例を数えるのみで、蕭子顯「從軍行」(『藝文類聚』卷四一)に、「縱橫向沮沢、凌厲取山田」(縱橫 沮沢に向かい、凌厲して 山田を取る)とあるのはその一つ。唐詩では、盛唐の頃より用例が多く見え始め、杜甫にも三例。うち「赤谷西崦人家」(『詳註』卷七)に、「溪迴日氣暖、徑轉山田熟」(溪は迴りて 日暖かに、徑は轉じて 山田熟す)とある。張籍にはこの一例のみ。

「三四畝」「畝」は、広さの単位で、一畝は、唐代では約五、八アール。百畝が一頃に相当し、一頃は均田制が行われていた時に成年男子が所有できた

土地の大きさ。

兩税法施行以前の均田制では、一人が所有する田地の大きさが決められており、『新唐書』食貨志一に、「授田之制、丁及男年十八以上者、人一頃、其八十畝為口分、二十畝為永業。老及篤疾、廢疾者、人四十畝……」(田を授くるの制、丁及び男年十八以上の者は、人ごとに一頃、其の八十畝を口分と為し、二十畝を永業と為す。老及び篤疾、廢疾の者、人につき四十畝……)とあり、これに拠れば、老人(六十歳以上)は四十畝となつてゐる。

また、張籍と同時代の白居易の「杜陵叟」(二五四)では、「杜陵叟、杜陵叟、歲種薄田一頃餘」(杜陵叟、杜陵叟、歳どしに種う 薄田 一頃の餘)と、長安南郊の杜陵に住む翁が一頃余りの田地を所有してことが詠われている。これらを「野老歌」の老農と比較した場合、老農の田地が労力を要する山間部にあり、しかも「三四畝」という猫の額ほどしかない極めて狭隘な田地であることがわかる。

李樹政注に、唐代前期、均田法が実施されていた時は、同時に三種類の土地所有の形式が存在し、一つは地主が占有する「永業田」、二つは農民が均田法に基づいて占有する田地(うち永業田が二十畝)、三つは田地を持たない百姓で、官田を持たないため、自分で幾畝かの田地を開墾する。均田法の崩壊に随つて土地は大量に併合され、こうした土地所有の形態は、農民が生存していく上での普遍的な形式となった。この詩の「老農」は、第三種の土地所有形式の農民である、と説明する。

### 3・4 苗疎税多不得食、輸入官倉化為土

「苗疎税多」苗がまばら、すなわち收穫は少ないのに税は多い。それにより、続く「不得食」という深刻な状況が必然的にもたらされる。

「苗疎」は六朝・唐代の詩に用例は見当たらないが、「疎」が植物などと結びつく例は多く見え、例えば太宗の「山閣晚秋」(『全唐詩』卷一)に、「疏蘭尚染煙、殘菊猶承露」(疏蘭 尚お煙に染まり、殘菊 猶お露を承く)とあるのはその一例。

「税多」あるいは「多税」は、六朝・唐代を通じて、張籍が二例用いている以外に用例がない。張籍のもう一例は、この詩と関わりの深い31「賈客樂」に、「農夫税多長辛苦、棄業寧為販宝翁」(農夫 税多くして 長に辛苦するも、業を棄てて寧ろ販宝の翁と為らんや)とあり、このこと同じく農民に課せられた重税という意味で用いられている。

なお、「多税」に類似した意味の「重賦」ということばが、後でも触れる白居易の「重賦」(七六)に詩題で用いられている。

〔不得食〕食べることができない。わずかしかないうちも税として持って行かれるため食べられない。三字の並びでは、唐詩にこの他用例が見られない。税の徴収に苦しむ庶民の苦境をこの三字でストレートに表現し得たのは、張籍ならではの言葉であろう。

〔輸入〕運び入れる。税として徴収した作物を「官倉」に収める。早く『史記』廉頗藺相如伝に、「李牧者、趙之北辺良將也。常居代雁門、備匈奴。以便宜置吏、市租皆輸入莫府、為士卒費。」(李牧は、趙の北辺の良將なり。常て代の雁門に居り、匈奴に備う。便宜を以て吏を置き、市租は皆莫府に輸入して、士卒の費と為す)とあり、このこと同じく税を納める意味である。六朝詩に用例が見えず、唐詩でもこの一例のみ。

〔官倉〕国が管理する倉庫。陳注も引く『隋書』食貨志に、「於諸州縁河津濟、皆官倉貯積、以擬漕運。」(諸州の河に縁いし津濟に於いて、皆官倉貯積し、以て漕運を擬る)とある。

六朝詩には用例が見られず、唐詩では中唐になって用例が見られる。孟郊「空城雀」(『全唐詩』卷三七二。一作として聶夷中の作)に、「一雀入官倉、所食寧損幾。」(一雀 官倉に入り、食らう所 寧ぞ損することの幾ばくならんや)とあり、また元稹「有鳥二十章」其一四(『元稹集』卷二五)に、「可惜官倉無限粟、伯夷餓死黃口肥。」(惜しむべし 官倉 無限の粟、伯夷餓死して 黃口肥ゆるを)と、人は飢え死にしているというのに、官倉には粟が大量の貯蔵されていると詠われる。

〔化為土〕老いた農夫が苦勞して收穫した作物も、税として取られ倉庫に運び込まれた後は、誰も食べないまま腐って土となってしまう。曹丕「与吳質書」(『文選』卷四二)に、「追思昔遊、猶在心目。而此諸子、化為糞壤。」(昔遊を追思すれば、猶お心目に在り。而るに此の諸子は、化して糞壤と為る)とあるのは人の死を言い、意味が少し異なる。

唐詩中に六例あり、杜甫に見えるのが最初。「寄薛三郎中璩」(『詳注』卷一八)に、「早歲与蘇鄭、痛飲情相親。二公化為土、嗜酒不失真。」(早歲 蘇鄭と与に、痛飲 情相親しむ。二公 化して土と為り、酒を嗜みて 真を失わず)とあるのも、曹丕の例と同じく人の死を言う。同様の例は、張籍12「築城詞」にも、「家家養男当門戶、今日作君城下土。」(家家 男を養いて 門戶に當つるに、今日 君が城下の土と作る)と見える。

人の死を表すもの以外では、李樹政注が「こと句法・内容ともに類似する

ことで指摘する白居易「重賦」(七六)の、「進入瓊林庫、歲久化為塵」(瓊林庫に進入し、歳久しくして 化して塵と為る)は、税として国の倉庫に運び込まれた絹や糸が、虚しく塵に変わっていくことを詠じた諷諭詩である。なお、静嘉堂抄本の注記に「為」を「如」に作るものがあると指摘される。

#### 5・6 歳暮鋤犁倚空室、呼兒登山收橡栗

〔歳暮〕年の暮れを言うと同時に、人生の終末である老年をも指す。ここでは前者の意味で用いられている。

六朝からすでに用例が多く見られ、顔延之「秋胡詩」(『文選』卷二二)、「歳暮臨空房、涼風起座隅」(歳暮 空房に臨めば、涼風 座隅に起こる)とあるのは、一年の暮れの意味。「空房」と一緒に使われる点で、このこと類似する。

唐詩においても常見の語。杜甫に十例を数える。張籍にもう一例、358「答鄒陽客葉名詩」に、「江皋歳暮相逢地、黄葉霜前半夏枝。」(江皋 歳暮 相逢の地、黄葉 霜前 半夏の枝)とあるのは、このこと同じく一年の暮れの意味で用いている。

〔鋤犁〕すき。「犁」は牛耕用のすきで、「鋤犁」で広くすきを指して言う。王粲「從軍詩五首」其一(『文選』卷二七)に、「不能效沮溺、相隨把鋤犁」(沮溺に效いて、相隨いて鋤犁を把る能わず)とある。唐詩には、このこと以外に十例ある。盛唐以降多く見られるようになり、例えば李白「贈從弟冽」(王琦注本卷一二)に、「日出布穀鳴、田家擁鋤犁」(日出でて 布穀鳴き、田家 鋤犁を擁す)とある。杜甫には二例。そのうちの一つ、陳注も挙げる「兵車行」(『詳注』卷二)に、「縦有健婦把鋤犁、禾生隴畝無東西」(縦い健婦有りて鋤犁を把るも、禾の隴畝に生じて 東西無し)とある。張籍はこの一例のみ。

〔倚空室〕刈り入れも終わり、年の暮れになって無用になったすきが、何もないがらんとした部屋に立てかけられている。「空室」は、陳注・徐注は、食べる物がない空っぽの部屋という意味に解釈している。

『史記』游侠伝に、「故季次、原憲終身空室蓬戸、褐衣疏食不厭」(故に季次、原憲は 終身空室蓬戸にして、褐衣疏食も厭かざるなり)とあり、季次

六朝詩の用例では、秦嘉「贈婦詩」(『玉臺新詠』卷九)に、「寂寂独居、寥寥空室」(寂寂たる独居、寥寥たる空室)とある。唐詩にこの他八例。李

頤「送劉四赴夏鼎」(『全唐詩』卷一三三)に、「朝持手板望飛鳥、暮誦楞伽對空室」(朝に手板を持ちて飛鳥を望み、暮に楞伽を誦して空室に對す)とある。杜甫には用例がない。張籍はこの一例のみ。

なお『全唐詩』卷三八二・『唐文粹』卷一六下は、「倚」を「傍」に作る。詩全体として見た場合、どちらでもそれほど大きな違いはないが、「倚」であれば壁に立てかけられていることを言い、「傍」であればすぐそばに置かれていることを言うのであろう。

「呼兒」子供を呼ぶ。身寄りもおらず、高齢のため自分で山に登ることもできず、近くの子供に頼んで「橡実」を拾ってきてもらうのであろう。「飲馬長城宿行」(『文選』卷二七)に、「呼兒烹鯉魚、中有尺素書」(兒を呼んで鯉魚を烹んとすれば、中に尺素の書有り)とある。唐詩の用例として、陳注は李白「將進酒」(王琦注本卷三)に、「呼兒將出換美酒、與爾同銷万古愁」(兒を呼び 將ち出して美酒に換え、爾と同じく銷さん 万古の愁い)とあるを引く。張籍にもう一例。199「贈令狐博士」、「騎馬出隨遊寺客、呼兒散寫乞錢書」(馬に騎りて 出でて寺に遊ぶ客に隨い、兒を呼んで散寫せしむ 錢を乞う書)とある。

「登山」六朝・唐代を通じて詩文に常見の語であり、陳注は『楚辭』九弁に、「僚慄兮、若在遠行、登山臨水兮、送將歸」(僚慄たり、遠行に在りて、山に登り水に臨み、將に帰らんとするを送るが若し)とあるを引く。張籍にもう一例、450「別段生」に、「送我登山岡、再拜問還期」(我を送りて山岡に登り、再拜して還期を問う)とある。

「橡実」どんぐり。食べる物が無い時に拾って食べる物。早く「橡栗」の語が、『莊子』盜跖篇に、「昼拾橡栗、暮栖木上」(昼に橡栗を拾い、暮に木上に栖む)と、古代人の生活を記すなかに見える。李冬生注に引く『晋書』摯虞伝に、「遂流離鄆杜之間、転入南山中、粮絶飢甚、拾橡実而食之」(遂に鄆杜の間に流離し、南山の中に転入し、粮絶え飢うること甚だしく、橡実を拾いて之を食らう)とあるのは、この詩と同じく「橡実」の語で見え、飢えをしのぐための食べ物の意。陳注が引く『後漢書』李恂伝に、「時歲荒、司空張敏、司徒魯恭等各遣子饋糧、悉無所受。徙居新安關下、拾橡実以自資」(時歲荒れ、司空張敏、司徒魯恭等 各おの子を遣りて糧を饋るも、悉く受くる所無し。居を新安關の下に徙し、橡栗を拾いて以て自ら資とす)とあるのも同じ意味。

六朝詩に「橡」の用例は見られない。唐詩において「橡」を最初に詠じた

のは杜甫であり、杜甫が使用して以降詩語として定着するようだ。杜甫「乾元中寓居同谷県作歌七首」其一(『詳註』卷八)に、「歲拾橡栗隨狙公、天寒日暮山谷裏」(歳どし橡栗を拾いて狙公に隨う、天寒く 日暮る 山谷の裏)とあり、また「八哀詩・故著作郎貶台州司戶榮陽鄭公虔」(『詳註』卷一六)に、「履穿四明雪、饑拾檣溪橡」(履は穿たる 四明の雪、饑えては拾う 檣溪の橡)とある。張籍にもう一例、418「董逃行」に、「重巖為屋橡為食、丁男夜行候消息」(重巖を屋と為し 橡を食と為し、丁男夜行して 消息を候う)とあり、戦禍を逃れて山中に逃げ込んだ年寄りや子供が食べる物として詠われる。

どんぐりは、皮日休の「橡媪歎」(『全唐詩』卷六〇八)に、「秋深橡子熟、散落榛蕪岡」(秋深くして 橡子熟し、散落す 榛蕪の岡に)とあるように、秋に実を結ぶ。この詩の老農も、秋税を納めた後食べる物が無く、子供に拾ってもらったどんぐりを食べて歳の暮れを何とか乗り切ろうとしているのであろう。

なお、続古逸叢本卷四・『唐文粹』卷一六下は「橡食」に作り、その場合「橡を拾い集めて食べる」。

#### 7・8 西江賈客珠百斛、船中養犬長食肉

「西江」この「西江」がどの川を指すかについては、高橋良行氏に「張籍「野老歌」における「西江賈客」について」(『學術研究』(外国語・外国文学編)四二、早稲田大学教育学部、一九九四年)がある。このなかで氏は、「野老歌」を採録する各注釈書の「西江」の説明は、以下の六つ、すなわち(1)珠江の主流である西江、(2)現在の江西省九江市一帯の長江、(3)江蘇省蘇州西方の長江、(4)長江の中下流域、(5)長江、(6)西の川(不特定)に分かれるとし、張籍以前或いは同時代の詩文に見える用例を検討した結果、長江中下流域を指すと結論づけられている。

唐詩における「西江」の用例は非常に多く、各詩で「西江」の指す川も異なっている。陳注が引く杜甫「公安送李二十九弟晉肅入蜀余下沔鄂」(『詳註』卷二二)に、「南紀連銅柱、西江接錦城」(南紀 銅柱に連なり、西江 錦城に接す)とあるのは、杜甫のいる公安県(荊州江陵府の南)より以西、成都までの長江の上流部分を指して言っている。

「野老歌」と主題が類似し、富商の贅沢な生活を批判した白居易「塩商婦」(一六二)にも、「本是揚州小家女、嫁得西江大商客」(本 是れ揚州小家の女、嫁し得たり 西江の大商客)と「西江」の語が見える。婦人の実家が揚州であり、それを受けて「西江」と言うからには、やはりこの富商も揚州近

辺の長江下流域を商売の拠点とし、「西江」もこの辺りを指すと考えるのが妥当かと思われる。

また、張籍の31「賈客樂」は、「野老歌」とは反対に、富商の生活の様子を中心に詠じた諷諭詩だが、そのなかに「金陵向西賈客多、船中生長樂風波」(金陵の向西 賈客多し、船中に生長して 風波を樂しむ)とある。この「向西」を、李冬樹注では「以西」で解釈する。塩見邦彦氏の『唐詩口語の研究』(一九九五年、中国書店)一七二頁では、「向」が軽い接頭語として使用される例を挙げ、「向」ほどの語にもつくかといえそうではなく、「向上、向下、向前、向後、向北、向南」などに限られている」と説明され、「向西」は挙げられていないが、この「向」も接頭語として解釈可能と考えられる。そうすると、張籍「賈客樂」の商人も、この詩と同じ地域を商売の拠点として活動していたと考えられる。

〔賈客〕商人。「估客」に同じ。樂府題に「估客樂」(『樂府詩集』卷四八)があり、斉の武帝を初めとして同題の樂府が数篇ある。張籍にも、この詩と密接な関係にある31「賈客樂」があることは先にも記した。唐詩の用例としては、前掲杜甫の「野老」に、「漁人網集澄潭下、估客船隨返照來」(漁人の網は 澄潭の下に集まり、估客の船は 返照に隨いて來たる)とある。

〔珠百斛〕「珠」は真珠。「斛」は、容量の単位で十斗。唐代の一斛は約六〇リットル。陳注が挙げる『三国志』蜀書・宗預伝に、「(孫權)遺預大珠一斛、乃還」(孫權)預に大珠一斛を遺り、乃ち還る)と、「珠」と「斛」が同時に用いられている。

六朝では、嵇康「養生論」(『文選』卷五三)に、「夫田種者、一畝十斛、謂之良田。(中略)謂商無十倍之価、農無百斛之望」(夫れ田種は、一畝に十斛、之を良田と謂う。(中略)謂えらく 商は十倍の価無く、農は百斛の望み無しと)とあるのは、收穫物の量を言い、蘇伯玉妻「盤中詩」(『玉臺新詠』卷九)に、「羊肉千斤酒百斛、令君馬肥麦与粟」(羊肉千斤 酒百斛、君が馬をして肥えしめん 麦と粟と)とあるのは、酒の量を言う。

唐詩では、この他九例見えるが、多くが酒の量を言い、杜甫の一例も同じ。酒以外では、陳注も引く同時代の韓愈「病中贈張十八」(『繫年集釈』卷一)に、「龍文百斛鼎、筆力可扛」(龍文 百斛の鼎、筆力 独り扛ぐべし)とあり、張籍の文才を評価し、百斛の鼎を持ち上げられるほどの筆力と絶賛する。「珠」とともに用いられた例としては、時代は下るが、李商隱「玉山」(『全唐詩』卷五三九)に、「珠容百斛龍休睡、桐松千尋鳳要棲」(珠は百斛を容れる 龍 睡るを休め、桐は千尋を払いて 鳳 要ず棲む)とある。張籍には

この一例のみ。

この「百斛」の「珠」が、商人の財産を言うのか、それとも商品として扱っている宝石を言うのかは明らかでないが、先にも挙げた張籍の31「賈客樂」に、「農夫稅多長辛苦、棄業寧為販宝翁」(農夫 稅多くして 長に辛苦す、業を棄てて寧ろ販宝の翁と為らんや)とあるのと関連させて考えれば、「珠」は商品の真珠と考えられる。

当時商人の中でも塩を扱う塩商人が、塩が専売であることを利用して巨額の富を得ていたことは、劉禹錫「賈客詞」(『箋証』卷二二)の序文に、「五方之賈、以財相雄、而塩賈尤熾」(五方の賈、財を以て相雄して、塩賈 尤も熾なり)と記されている。有名な白居易「塩商婦」(一六二)は、その塩商人の妻の贅沢な暮らしを詠じた諷諭詩である。

「西江」の【語釈】で説明したように、この詩の富商は揚州を中心とした長江下流域を活躍の拠点としていたと考えられるが、李廷先氏の『唐代揚州史考』(江蘇古籍出版社、一九九二年)に拠れば、唐代の揚州には、塩商人の他にも真珠や宝石を扱う胡商が多くいたとされる(三七八―三八一頁)。「野老歌」の後半四句は、そうした当時の背景を踏まえて書かれているのだろう。なお「百」を『唐詩別裁集』卷八は「成」(真珠が斛ほどに成る)に作る。

〔養犬〕犬を飼う。六朝詩・唐詩の用例は張籍のこれのみ。

この犬は商人がペットとして買っていたものと考えられるが、中唐期になって、そうしたペットとしての犬が詩に詠じられるようになることは、河田聡美氏の「イヌのいる風景―唐詩に描かれたイヌたち―」(『中唐文学の視角』、創文社、一九九八年)に述べられており、この詩も引用されている。

〔食肉〕肉を食べる。ペットの犬が肉を食べるということで、富商の贅沢な暮らしを象徴的に表す。ここでは、食料が無くどんぐりを拾う老農と対比されている。

陳注が引く『孟子』梁惠王上には、「鶏豚狗彘之畜、無失其時、七十者可食肉矣」(鶏豚狗彘の畜、其の時を失う無くんば、七十の者 以て肉を食らうべし)と、善政を説く孟子のことばに見え、「七十」の老人も登場する。張籍がこれを踏まえているとすれば、本来善政が行われている時には年寄りも肉を食べることができるといふのに、今老人は不合理的な税制のために貧困に苦しみ、その代わり、納税を逃れた富商の犬が肉を食べているとし、矛盾した社会を厳しく明確に批判していることになる。

用例は、六朝詩にはなく、唐詩にも、張籍と同時代かそれ以降の詩に見えるのみ。盧仝「揚州送伯齡過江」(『全唐詩』卷三八八)に、「諸侯尽食肉、

「壯気吞八紘」(諸侯 尽く肉を食らうも、壯気 八紘を吞む)とあるのは金持ちの食事をいい、白居易「対酒示行簡」(三三七)の、「人生苟有累、食肉常如飢」(人生 苟しくも累い有れば、肉を食らうも常に飢うるが如し)も、贅沢な食事を言う。

なお、富商の贅沢な暮らしを象徴するとして、先に挙げた白居易や劉禹錫の詩では、その妻や子供の様子を取り上げる。白居易「塩商婦」では、婦人が身につける美しい装飾品、衣装や、毎朝食べる美味しい食事を詠じ、劉禹錫「賈客詞」は、「妻約雕金釧、女垂貫珠纓」(妻は雕金の釧を約し、女は貫珠の纓を垂る)と、妻や娘が身につける宝石を詠ずる。これを「野老歌」と比べた場合、ペットの犬が肉を食べていると詠ずる方が、より貧農との対比が明確となり、老農の貧窮ぶりが強調されるように感じられる。

【補】

「野老歌」の構成は、前半四句と後半四句に分かれ、前半で貧農に重税を課す政府を、後半では貧農とは対照的に贅沢な暮らしをする富商を批判している。それぞれの内容は、いずれも中唐期に多作される諷諭詩の重要なテーマであり、【語釈】でも指摘したように、白居易や劉禹錫に同様の詩が見られる。以下、容易に想起し得る比較的著名な詩を挙げる。

- ①納税に苦しむ農民
  - ・白居易「重賦」(秦中吟)「杜陵叟」(新樂府)
- ②富商に対する批判
  - ・白居易「塩商婦」(新樂府)
  - ・劉禹錫「賈客詞」
  - ・張籍「賈客樂」

こうした詩と張籍「野老歌」を比較した時、①において、白居易が一篇の詩を使って貧農に重税を課す政府を批判しているのに対し、先述したように、張籍「野老歌」ではわずか四句でそのことを表現している。また白居易が、為政者に対する批判を詩の中で直接述べているのに対し、張籍は、老翁が作った作物が倉庫に運ばれ土になつたと、ただ状況を描写するのみで非難の言葉を直接述べることはない。同じ手法は後半四句にもうかがえ、どんぐりを拾う老翁に、肉をもらう富商の犬を対置するだけで、張籍自身は何らコメントしておらず、張籍は是非の判断を読者に委ねている。同様のテーマを扱った諷諭詩でありながら、ここには白居易と張籍の表現手法の相違が見られるよ

うに思う。

さて「野老歌」の後半部では、貧農とは正反対の立場にいる人物として富商が非難されているのであるが、そうした構図は②に挙げた詩にも見える。これは、土地を所収するため納税の義務から逃れられない農民に対し、商人が、各地を行商して回ることとそうした義務から逃れ得る立場にあつたからであろう。そのことは、劉禹錫「賈客詞」では、「行止皆有樂、閑梁自無征」(行止 皆 樂しみ有り、閑梁 自ら征無し)と詠われ、また白居易「塩商婦」(二六二)にも、「壻作塩商十五年、不属州属天子。每年塩利入官時、少入官家多入私」(壻は塩商と作りて 十五年、州属に属せず 天子に属す。毎年 塩利の官に入る時、少しく官家に入れ 多く私に入る)とあり、商人が、州属ではなく国に直接納税することで私利を蓄えていることが非難されている。また張籍自身の「賈客樂」にも、「年年逐利西復東、姓名不在異籍中」(年年 利を逐いて 西に復た東に、姓名 異籍の中に在らず)と批判的に詠われている。

こうした重税に苦しむ貧農と、それとは対照的に莫大な財を蓄える富商の出現は、李樹政注では、唐の中頃、具体的には徳宗の建中元年(七八〇)に兩税法が施行されたことに起因すると説明する。ただ、富商の活動拠点である長江中下流域では、兩税法施行以前から商業を重視し農業を軽んずる風潮があり、『新唐書』李襲誉伝に、「揚州、江、吳大都会。俗喜商賈、不事農」(揚州は、江、吳の大都会なり。俗 商賈を喜び、農を事とせず)、兩税法施行後、ますますそれに拍車がかかったということであろう。中唐の詩人達は、新たな制度によって引き起こされた社会の矛盾を、積極的に諷諭詩の題材に取り入れていると言える。

揚州を中心とした長江下流域は、当時商業の最も盛んに行われた場所であるが、同時にこの地域は、当時国の税収の重要な供給源であった。例えば韓愈「送陸歙州詩序」(『校注』巻四)には、「当今賦出於天下、江南居十九」(当今 賦の天下に出づること、江南 十が九に居る)と、税収の九〇パーセントが江南からのものであると記し、また憲宗の「元和十四年七月二十三日上尊号赦」(『文苑英華』巻四二二)でも、「天宝已後、戎事方殷。兩河宿兵、戸賦不入。軍国費用、取資江、淮南」(天宝已後、戎事 方に殷なり。兩河 兵を宿め、戸賦 入らず。軍国の費用は、資を江、淮南に取る)と、兩河、すなわち河南・河北からの税収が滞る中、軍事費を江南・淮南の地より賄っていたと記されている(以上の二例は『唐代揚州史考』参照)。こうしたなかで、商人の活躍とその脱税による税収の不足は、必然的にそのしわ寄せが農民に及んだと考えられる。先にも挙げた劉禹錫「賈客詞」の序に、「或曰、賈雄則農傷」(或ひと曰く、賈雄なれば則ち農傷なわる)とあるように、



商人と農民の生活が反比例の関係にあるということは、当時の一般的な認識であったと考えられるのである。

また中国には、こうした農民の貧窮が、ひいては国全体の貧窮につながるという考えが早くからあり、そのことは、例えば『史記』孝文本紀には、「農、天下之本」（農は、天下の本）と、農業が国家運営の根本であると記され、また『漢書』食貨志上には、「糴其貴傷民、甚賤傷農。民傷則離散、農傷則国貧。故甚貴与甚賤、其傷一也。善为国者、使民毋傷而農益勸」（糴（かい）よぬ。買い入れた穀物）は其れ貴ければ民を傷ない、甚だ賤ければ農を傷なう。民傷なわれば則ち離散し、農傷われば則ち国貧し。故に甚だ貴しと甚だ賤しとは、其れ傷うこと一なり。善く国を為す者は、民をして傷うこと母くして農をして益ます勸めしむ）と、農民が損をすれば、それが国家の貧窮につながる」と記される。中唐の詩人が、諷諭詩の中で富商や為政者を批判しているのは、単なる貧農への憐れみの感情からというのではなく、一士大夫として為政者に対し忠告しているのだと考えられる。

なお最後になるが、「野老歌」についての専論に、前掲高橋氏の論文以外にも、朱宏恢・徐栄街「自成一家、風格多樣——読張籍詩「野老歌」和「夜到漁家」——」（『閲読与欣賞』九、一九八四年）、高建中氏「張籍詩歌讀札（三則）」（『中文自學指導』十、一九九〇年）の二篇の論文がある。高橋氏と高氏の論文は、【語釈】【補】を記すに当たり大いに参考にさせていただいた。朱・徐両氏の論文は未見である。

(畑村)

## 10 寄衣曲

### 【題解】

衣を寄するうた。『樂府詩集』卷九四「新樂府辭」の部分に収める。張修蓉氏『中唐樂府詩研究』も「新題新意」に分類している。

『樂府詩集』では、「寄衣曲」の前には王建の「送衣曲」、その前には王建と劉禹錫の「擣衣曲」が収められ、さらにその前の部分には、孟郊・元稹・鮑溶の「織婦詞」、王建の「織錦曲」と温庭筠の「織錦詞」、王建の「当窓織」が並んでいる。中唐の頃から、女性の針仕事や機織りの苦労が、樂府の題材としてたびたび取り挙げられるようになったことを表しているよう。

この樂府題については、8「白紵歌」の【補】に挙げた、赤井益久氏の「送

寒衣——唐詩『送衣曲』をめぐって——に詳しい考察がある。氏によれば、六朝期の徒詩「擣衣詩」では、本来、砧で打つ「擣衣」の部分と、衣を良人へ送る「寄遠」の部分とがあったが、「寄遠」の要素は次第に求められなくなる。唐代になって「擣衣」が樂府系の詩題を持つようになり、中唐の王建・張籍に至って、「擣衣」と「寄遠」の要素を別個の新題樂府として設定するようになるという。そして、六朝期に遠方の良人の魂魄を招きつなぐものであった「寄遠」と、現実生活の中で辺境にいる防人に衣を送ったことに由来する「送衣」は様相を異にしており、「送衣」が独立したことを、擬古性の束縛を離れて、生新で切実な閨怨の声の誕生であったとされる。そして氏は、樂府の新生を意図した王建・張籍が庶民の心を詠じた作として高く評価しておられる。

また、松原朗氏の「盛唐から中唐へ——樂府文学の変容を手掛かりとして——」（『中国詩文論叢』第一八集、一九九九年）も、この作品において、自分の手で作ったものを送ろうとすること、夫婦関係以外の姑が登場すること、の二点から、具体的な日常性を持ち込んで、伝統的な閨怨樂府を突破する一つの試みと位置づけておられる。

なお、李樹政注では、従来の府兵制において兵器や衣類を自分で用意しなければならなかったのが、中唐以後の募兵制で政府から支給されるようになったことを指摘している。同様の指摘は高若蘭氏の「試論張籍詩中的婦女形象」（『大陸雜誌』第九五卷第二期、一九九七年）にも見え、松原氏もその点に触れる。赤井氏前掲論文はこのことについても詳細に考証されており、募兵制となって政府の支給が始まった後も、依然として民間からの送衣に頼っていた状態だったようである。

### 【本文・書き下し文】

- |           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1 織素縫衣獨苦辛 | 素を織り 衣を縫って 独り苦辛す   |
| 2 遠因回使寄征人 | 遠く回使に因りて 征人に寄せんとす  |
| 3 官家亦自寄衣去 | 官家も亦た自ずから 衣を寄せ去るも  |
| 4 貴從妾手着君身 | 妾が手よりして 君が身に着くるを貴ぶ |
| 5 高堂姑老無侍子 | 高堂 姑老いて 侍子無く       |
| 6 不得自到邊城裏 | 自ら辺城の裏に到るを得ず       |
| 7 慙慙爲看初着時 | 慙慙に為に看よ 初めて着くる時    |
| 8 征夫身上宜不宜 | 征夫の身上 宜しきや宜しからずや   |

【口語訳】

- 1 白ぎぬを織り 着物を縫うのに たった一人苦しみ抜いて
- 2 前線から帰っている使いの方に頼んで 遥か遠くの夫へ送ります
- 3 お上はお上で 着物を送って下さいませが
- 4 私が手ずから縫ったものを あなたが着てくれることが大事なのです
- 5 奥座敷には年老いたお義母さまがおられ お仕えする子供もいないので
- 6 私自身が 辺境の町へ持つていくことはできません
- 7 どうか私の代わりに 気を付けて見て下さい 初めてこれを着た時
- 8 戦地にいる夫の身体に ぴったりかどうかを

【押韻】

辛・人・身—上平一七真  
 子・裏—上声六止  
 時—上平七之 宜—上平五支（同用）

【語釈】

1・2 織素縫衣独苦辛、遠因回使寄征人

〔織素〕絹を織る。素は白絹。古く「古詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』巻一)に「十三能織素、十四学裁衣」(十三にして能く素を織り、十四にして衣を裁つを学ぶ)という例がある。六朝詩においては、王僧孺の「鼓瑟曲・有所思」(『玉臺新詠』巻六)に「不堪長織素、誰能独浣紗」(長く素を織るに堪えず、誰か能く独り紗を洗わん)というなどの用例が見える。

唐詩における用例は少ないようで、初唐の虞世南が二例用いている後は、盛唐期に用例が見えず、張籍とほぼ同時期の羊士諤・李賀に至って一例ずつ現れるようだ。虞世南の例を一つ挙げておこう。「怨歌行」(『全唐詩』巻三六)に「裁纨悽断曲、織素別離心」(纨を裁つ 悽断の曲、素を織る 別離の心)という。張籍にもこの一例のみ。

続古逸叢書本・『唐文粹』等は「織素」に作る。「織素」であれば、きめの細かい絹のことであろう。『北堂書鈔』巻一三四に引く徐幹の「円扇賦」に「惟合歛之奇扇、非伊洛之織素」という用例がある(『太平御覽』巻七〇二は「团扇賦」とし、「非」を「肇」に作る)。六朝詩には用例がないようだ。唐詩においても、他には、晩唐の王貞白の「白牡丹」(『全唐詩』巻七〇一)に「穀雨洗織素、裁為白牡丹」(穀雨 織素を洗い、裁ちて白牡丹と為す)という一例を検しうるのみ。

〔縫衣〕儒者の着る、袖の下から両脇を縫い合わせた「縫掖の衣」の略称として、『莊子』や李白の詩に例が見えるが、ここでは単にころもを縫うことであろう。この意味での用例としては、作者不詳の「休洗紅」二首其一(『古詩紀』四三)に「不惜故縫衣、記得初按茜」(惜しまず 故と縫いし衣、記し得たり 初めて茜を按ず)と見える。なお、赤井氏が六朝期の「擣衣詩」の嚆矢とされる謝惠連の「擣衣」(『文選』巻三〇)に「裁用箭中刀、縫為万里衣」(裁ちて箭中の刀を用い、縫いて万里の衣を為す)の句がある。

このことばも唐詩における用例はあまり多くない。張籍に先立つ例としては、沈佺期の「雜詩三首」其一(『全唐詩』巻九六)に「怨啼能至曉、獨自懶縫衣」(怨啼 能く曉に至り、独自 衣を縫うに懶し)の句があり、孟浩然の「寒夜」(『全唐詩』巻一六〇)に「閨夕綺窗閉、佳人罷縫衣」(閨夕 綺窗閉じ、佳人 衣を縫うを罷む)の句がある。ともに閨怨に関する例である。先立つもう一例、岑参の「臨河客舍呈狄明府兄留題南樓」(『岑参集校注』巻一。以下岑参の詩の引用は同書に拠る)に「河辺酒家堪寄宿、主人小女能縫衣」(河辺の酒家 寄宿するに堪えたり、主人の小女 能く衣を縫う)というの、やや趣を異にする。

張籍にはこの一例のみ

〔独苦辛〕たった一人で苦しんでいる。「独」の文字が、帰らぬ夫を待ちながら衣服を作るという作業の孤独さを、みごとに際立たせている。

「苦辛」は苦しみ、苦勞。常見の語。古く「古詩十九首」其四(『文選』巻二九)に「無為守窮賤、轉軻長苦辛」(為す無かれ 窮賤を守り、轉軻して 長く苦辛するを)と見え、六朝詩・唐詩ともに膨大な用例がある。「辛苦」と同義であるが、古詩十九首の例がすでにそうであるように、「辛」の文字で押韻する場所に多く用いるようだ。

夫を待つ女性の悲しみを「苦辛」と表現した例としては、李嶠の「倡婦行」(『全唐詩』巻六一)に「团扇辞恩寵、回文贈苦辛」(团扇 恩寵を辞し、回文 苦辛を贈る)の句がある。

張籍の敬愛した杜甫に五例、うち「前出塞九首」其三(『詳註』巻二)に「哀哉兩決絶、不復同苦辛」(哀しい哉 両つながら決絶し、復た苦辛を同じうせず)というの、この詩と表裏の関係にある出征兵士の苦勞を、樂府において表現した例である。

張籍にはこの一例のみ(「辛苦」は五例の用例がある)。

〔遠因回使〕「因」は、李冬生・李樹政注が指摘するように、ここでは頼る

意。なお、何気なく用いられた「遠」の文字が、夫との距離を感じさせ、「征人」と呼応しつつ悲哀を増している。

「回使」は、徐注・李冬生注・李樹政注いずれも、前線から一時帰ってきている使者のことをいうとする。一応これに従ったが、一時帰っている使者は再び辺境へと戻るのだから、「前線へと帰って行く使者」と解することもできるかもしれない。少なくとも、衣を寄せる妻の立場からいえば、そちらの方が重要なのではないだろうか。

用例は少なく、管見の及ぶ限りでは、盧綸の詩題に「夜中得循州趙司馬侍郎書、因寄回使」(夜中 循州趙司馬侍郎の書を得て、因りて回使に寄す。『全唐詩』巻二七八)といい、白居易の「送客春遊嶺南二十韻」(一〇一六)に「迴使先伝語、征軒早返輪」(迴使 先ず語を伝え、征軒 早く輪を返せ)という例がある。白居易の例は、友人の赴く嶺南から遣わされて都へ一時帰る使者をいうようだ。

「寄征人」「征人」は出征している人。ここでは夫をいう。上の「遠」を承けるとともに、末句の「征夫」と呼応している。

これも常見の語で、六朝詩・唐詩ともに多くの用例がある。陸機の「飲馬長城窟行」(『文選』巻二八)に「獠狁亮未夷、征人豈徒旋」(獠狁 亮に未だ夷がず、征人 豈に徒らに旋らんや)というの、樂府の中で出征兵士について用いられた例。「子夜四時歌」秋歌十八首其三(『樂府詩集』巻四四)に「征人難為思、願逐秋風歸」(征人 思いを為し難し、願わくは秋風を逐いて帰らんことを)というの、女性の側から出征兵士を呼んだ例。

唐詩においても、李益の「夜登受降城聞笛」(『全唐詩』巻二八三)に「不知何処吹蘆管、一夜征人尽望鄉」(不知何処吹蘆管、一夜征人尽望郷)という句などは有名である。

杜甫に一例、「秋笛」(『詳註』巻八)に「他日傷心極、征人白骨歸」(他日傷心の極み、征人 白骨歸る)という句がある。

張籍には他に二例、77「出塞」に「征人皆白首、誰見滅胡時」(征人 皆な白首、誰か見ん 胡を滅ぼすの時)という例は、出征兵士について用いたもの。33「車遥遥」に「征人遥遥出古城、双輪齊動駟馬鳴」(征人遥遥として 古城を出で、双輪齊しく動き 駟馬鳴く)という例は、単に旅人の例か。一首の内容がつかみがたく、女性ではないかもしれないが、待つ側の立場から詠じられていることは確かかなようである。

なお、「征人」「征夫」を待つ女性を中唐になって「征婦」と表現することについては、7「征婦怨」の【題解】参照。

冒頭の二句。樂府題の「寄衣」の状況が描かれている。8「白紵歌」の【補】で触れたように、同じく夫の着る服を作りながら、「白紵歌」では着てくれる時を楽しみに衣服を作っていたのが、この詩では「独」り「苦辛」を味わう姿となっている。

### 3・4 官家亦自寄衣去、貴従妾手着君身

「官家亦自寄衣去」お上の方でも着物を送りはしますが。

「官家」は、政府、お上。口語的表現である。塩見邦彦氏『唐詩口語の研究』(一九九五年、中国書店)参照。陳注にも引く、晋の安帝の義熙初の童謡(『晋書』五行志中および『宋書』五行志二)に「官家養蘆化成荻、蘆生不止自成積」(官家 蘆を養いて 化して荻と成り、蘆生じて止まず 自ら積むを成す)というの、庶民の口吻であろう。六朝期にはもう一例見え、梁の「鉅鹿公主歌辞」三曲其一(『樂府詩集』巻二五)に「官家出遊雷大鼓、細乘犢車開後戸」(官家出遊して 大鼓を雷ち、細やかに犢車に乗り 後戸を開く)というが、これも民謡である。

塩見氏の書にも例を挙げておられるが、唐においては、初盛唐の詩には例が見えず、張籍・王建・白居易らに至って、多くの用例が現れるようになる。特に白詩に多いことについても塩見氏が指摘されている。

張籍には他に三例見えるが、15「牧童詞」39「烏啼引」415「廢宅行」と、全て樂府の中で用いられている。

「自」の文字、政府は政府で独自に、というニュアンスであろう。

「寄衣去」の「去」は、やはり口語的な表現と思われる。志村良治氏の『中国中世語法史研究』(三冬社、一九八四年)六五頁に動詞の後につく補助動詞としての「去」の説明があり、ここと同じく動詞と「去」の間に賓語を伴う例として、王建「尋李山人不遇」のなかの一句「従頭石上留名去」(を挙げる)。

前線の夫へ着物を送るという行為は、赤井氏前掲論文に多くの例を挙げるように、六朝以来の詩の題材となっているが、「寄衣」ということば自体の用例は、張籍・王建ら以前の詩には見当たらないようだ。「送衣」ということばも状況は同じである。

このことばの同時代の用例として、韓愈の例を挙げておこう。「送区弘南帰」(『繫年集釈』巻五)に「独子之節可嗟啼、母附書至妻寄衣」(独子の節 嗟啼すべし、母は書を附し至り 妻は衣を寄す)という。

張籍の「寄衣」の用例はこれのみ。「送衣」は用例がない。

〔貴従妾手着君身〕私の手で作ってあなたに着てもらうことが大事なのです。

「従」は「よりす」起点を表す。ここでは私の手から出る、つまり手縫いであることをいうのであろう。「妾手」と「君身」が対応しており、身体を意識した、フィジカルで切実な表現であると感ぜられる。

「妾手」は、李白の「黄葛篇」(王本巻五)に「此物雖過時、是妾手中跡」(此の物 時を過ぐと雖も、是れ妾が手中の跡なり)という句があるほか、詩における用例が見当たらない。張籍の例もこれのみ。李白の例も、遠くの夫へ送る着物が手縫いであることを強調した表現である。

「君身」の詩における用例には、傅玄の「車遥遥篇」(『玉臺新詠』巻九)に「君安遊兮西入秦、願為影兮随君身」(君安くにか遊ぶ、西のかた秦に入る、願わくは影と為って 君が身に随わん)の句がある。女性から男性をいう例。

唐詩では、杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」(『詳註』巻一)に「自是君身有仙骨、世人那得知其故」(自らは是れ 君が身には仙骨有り、世人那ぞ其の故を知るを得ん)というなどの用例がある。

張籍にはもう一例、40「促促詞」に「願教牛蹄团团一角直、君身常在心不得」(願わくは牛蹄をして团团たらしめ一角をして直からしめんも、君が身の常在に在ること 応に得ざるべし)という。これも貧しい家の妻が、夫の身体を表現したもの。

先に「征人」と呼んだ夫を、ここでは「君」と呼んでいる。「妾」との表現上の対応もあるが、遠くにいる「征人」であるが、この手の中にある衣服によって、自分と夫がつながっているという思いを込めた表現なのではないだろうか。

冒頭の二句に続いて、自分が着物を送る理由が詠じられている。

#### 5・6 高堂姑老無侍子、不得自到邊城裏

〔高堂〕は奥座敷。義父母のいるところ。3「雑怨」にも「妾身甘独歿、高堂有舅姑」(妾身 独り歿するに甘んずるも、高堂には舅姑有り)と見えた。

その語釈参照。なお、ここでは父母の居る場所の例として、李白の例を引いておいたが、楽府の例として、古楽府「相逢行」(『樂府詩集』巻三四)などに「小婦無所為、挾瑟上高堂」(小婦 為す所無く、瑟を挟んで 高堂に上る)という例を付け加えておこう。

〔姑老無侍子〕姑は年とっており、世話する子供がいない。

「姑老」は、先にも引いた張籍の40「促促詞」に「家中姑老子復小、自執吳綃輸稅錢」(家中姑老いて 子復た小なり、自ら吳綃を執りて 稅錢を輸す)という例が見えるほか、用例を見いだし得ない。夫が出稼ぎしている貧しい家で、姑が年老い、子供がまだ小さいことをいう例。

「侍子」は、陸倕の「石闕銘」(『文選』巻五六)に「教臻侍子、化洽期門」(教えは侍子に臻り、化は期門に洽し)という例が見えるが、これは天子に侍する諸侯の子の意。盧照隣の「明月引」(『全唐詩』巻四一)に「文姬絕域、侍子他郷」と見えるのも、その例であり、張籍のもう一例、「送金少卿副使歸新羅」に「久為侍子承恩重、今佐使臣銜命歸」(久しく侍子と為りて 恩を承くること重く、今使臣を佐けて 命を銜んで歸る)というのと同じ。

父母に仕える子供の意味の用例としては、同時代の于鵠の「送遷客二首」其一(『全唐詩』巻三二〇)に「白頭無侍子、多病向天涯」(白頭 侍子無く、多病 天涯に向かう)という例が見えるのみ。

〔不得自到邊城裏〕自分で辺境の町に行くことができない。自分で着物を届けられないことをいう。

「辺城」は2「西州」に「羌胡拋西州、近甸無辺城」(羌胡 西州に抛り、近甸に 辺城無し)と見えた。その【語釈】参照。

ここでは、自分で衣服を送り届けたいと気持ち詠じられているが、出征兵士の妻が夫について行きたいという願いを述べる例としては、杜甫の名作「新婚別」(『詳註』巻七)に「誓欲随君去、形勢反蒼黃」(誓いて君に随いて去かんと欲するも、形勢 反つて蒼黄たり)という。張籍の14「別離曲」にも、「不如逐君征戰死、誰能独老空閨裏」(如かず 君を逐いて 征戦して死するに、誰か能く独り老いん 空閨の裏)の句がある。

またここでは、年老いた姑がいることが、妻が自分で着物を届けられない理由となっているが、類似した状況は、先に「高堂」の語釈で引いた3「雑怨」の句にも見えた。また、7「征婦怨」の「夫死戰場子在腹、妾身雖存如昼燭」(夫は戰場に死して 子は腹に在り、妾身 存すと雖も 昼の燭の如し)では、妊娠しているために、死ぬに死ねないという状況が詠じられている。それぞれの【語釈】参照。

自分で着物を送り届けられないもどかしさが詠じられた二句。

#### 7・8 慙慙為看初着時、征夫身上宜不宣

「慙慙爲看初着時、征夫身上宜不宜」この二句、兩様の解釈がある。

徐注は、「為」を「夫のために」と解したようで、夫が家にいた頃に、初めて夫のために着物を作ったときの長さや大きさを、注意深く思い出し、夫にびったりかどうかを考えて新しい着物を作っていると説明する。なお、同じ方向で、「初着時」は、新しい服を夫が初めて着る時を想像するとも解せよう。陳注に、謝惠連の「擣衣」(前出)の「腰帶準疇昔、不知今是非」(腰帶 疇昔に準ふ、知らず 今のは非なるを)の句を引き、「此師其意」(此れ其の意を師とす)というのも、同様であろう。

これに対して、李樹政注は、「自分のために」と解釈したようで、新しい服を着る時、夫の身体にびったりかどうか、自分に代わって使者に注意して見てもらわなければならないことをいうと解釈する。さらに、使者の前なので、妻は夫の身体の近況を細かく尋ねることがはばかられて、始めて着た時に合うかどうか見てくれるように頼むしかないのだと説明している。

どちらの解釈も成り立ちうるであろうし、特に謝惠連の例からすると前者の方が伝統に沿った解釈といえるかもしれないが、ここでは李樹政注にしたがって解釈してみた。

前者の場合、夫の着るときのことを想像して服を作るしかないという、悲しくもどかしい妻の状況は、比較的静かに述べられているように思われる。後者の解釈では、「夫のそばに行けない私に代わって、どうか気を付けて見て下さい」と、妻の心情がより直截的に吐露されると感じられよう。前の部分で、「自分自身で戦場に持つていきたいのに、姑が年老いているためそれができない」と、もどかしい思いを強く打ち出している。ここは、それを承けて、換韻して二句まとまった結末部分となっているから、妻の強い心の叫びが表現されていると考えた方がよいのではないだろうか。

ただ、李樹政注は、使者の前であるから細かく尋ねられないと、非常に論理的に解釈しているが、そこまで考える必要はないのではなからうか。樂府の形式でもあり、広く読者(あるいは聴衆)に対して、妻の心の叫びが表現されていると見ればよいのではないかと思う。

「慙慙」は「殷勤」に同じ。丁寧に、注意深く。よく用いられることばである。陳注は司馬遷の「報任少卿書」(『文選』卷四一)に「未嘗銜盃酒、接慙慙余權」(未だ嘗て盃杯酒を銜み、慙慙の余權を接えず)というのを引く。

詩にも多く用いられ、曹植の「贈白馬王彪」(『文選』卷二四)に「何必同衾幃、然後展慙勤」(何ぞ必ずしも 衾幃を同じうし、然る後に 慙勤を展べん)の句があるなどの用例がある。唐詩においても、多くの用例があるが、郭震の「子夜四時歌六首春歌二首」其二に(『全唐詩』卷六六)「贈子同心花、殷勤此何極」(子に贈る 同心の花、殷勤 此れ何ぞ極まらん)というの、

女性の男性への愛情を表現した例である。

また、作者不詳の「伊州歌」第一(『樂府詩集』卷七九。『全唐詩』卷一二八に王維の作とするのは誤りか)に「征人去日慙慙囑、歸雁來時數寄書」(征人去る日 慙慙に囑す、歸雁 來る時 數しば書を寄せよ)という例は、「征人」のことばとともに用いており、やはり作者不詳の「突厥三台」(『樂府詩集』卷七五)に「日旰山西逢驛使、殷勤南北送征衣」(日旰れて 山西 驛使に逢う、殷勤として 南北 征衣を送る)という例は、送衣について用いた例である。ただ、杜甫には用例がないようだ。

張籍には他に五例。そのうち四例は、436「送遠曲」に「殷勤振衣兩相囑、世事近來還淺促」(殷勤として衣を振り 兩つながら相ひ囑す、世事 近來 還ほ淺促たり)というなど、友人との別離の情を形容した例である。もう一例、438「春日行」に「樹樹殷勤盡繞行、攀枝未遍春日暝」(樹樹 殷勤として 尽く繞り行き、枝を攀ずること未だ遍からず 春日暝なり)というの、閑適の情を表現するのに用いた例であろう。

「征夫」は、遠くへ出かけている人。常見の語。『毛詩』小雅「皇皇者華」に使者を指して用いるように、出征兵士とは限らないが、同じく『毛詩』小雅「何草不黃」に「哀我征夫、獨為匪民」(哀し 我が征夫、独り民に匪ずと為す)というように、特に出征兵士に用いる例も、古くから多くある。王粲の「從軍詩五首」其二(『文選』卷二七)に「征夫懷親戚、誰能無恋情」(征夫は 親戚を懷う、誰か能く 恋情無からん)というの、出征兵士に用いている。

唐詩においても多くの用例がある。王勃の「秋夜長」(『全唐詩』卷五五)に「調砧乱杵思自傷、思自傷、征夫万里成他鄉」(調砧乱杵 思いて自ら傷む、思いて自ら傷む、征夫万里 他郷に成たり)という例は、このことと同じく、冬着を作る妻が出征した夫を指している例。杜甫には詩中に二例、「新婚別」(『詳註』卷七)に「嫁女与征夫、不如棄路傍」(女を嫁して 征夫に与うるは、路傍に棄つるに如かず)というの、有名な例である。また、「征夫」(『詳註』卷一二)の詩もある。

張籍は他に324「隣婦哭征夫」に「双鬢初合便分離、万里征夫不得隨」(双鬢初めて合して 便ち分離し、万里 征夫 隨うを得ず)と、詩題と詩中に用いている。この詩の五六句と同じく、出征した夫のもとへ行けない悲しみを詠じている。

先には「君」と呼んだ夫が再び「征夫」ということばで表現される。第2句の「征人」と首尾を対応させる意図であろうが、唯一のつながりである衣を使者の手にゆだねることによって、やはり遠い存在であることが再び意識

されるのを暗示しているように思われる。

「宜不宜」肯定と否定を重ねた、いわゆる反復（正反）疑問文である。これも口語的な表現であろうか。

詩における用例が、中唐の竇参にもう一例のみ見える。「湖上閑居」（『全唐詩』卷三三四）に「高枝但各有、安知宜不宜」（高枝 但だ各おの有り、安んぞ知らん 宜しきや宜しからずや）という。

結びの二句。自分で見ることができないから、私に代わってねんごろに見て下さいという、妻の訴えであろう。

### 【補】

この詩は、換韻によって以下のように分けられよう。

1 ～ 4 状況設定。

5・6 妻の思い。自分で着物を届けられないもどかしさが詠まれる。

7・8 妻の思い。読者への訴えかけによって結びとしている。

用語は口語的であり、夫を思う妻の口吻をそのまま伝えようとしていると思われる。徐注・李樹政注等は、反戦の思いを述べたものとしている。そこまで読みとることも可能であろう。

(橋)

〔附記〕本稿は平成十二年度宇部工業高等専門学校特別研究費による研究成果の一部である。